
ストライクウィッチーズ 木星より愛をこめて

G P

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストライクウィッチーズ 木星より愛をこめて

【Nコード】

N51030

【作者名】

GP

【あらすじ】

人類がネウロイよりヴェネチア・ローマーニヤを解放したのも束の間、魔力を使う新型ネウロイの出現によって形勢は逆転する。

圧倒的不利な状況の中、多くのウィッチが犠牲になってしまう。再び第501統合戦闘航空団が結成されることになるのだが、彼らの中にも犠牲者は出ていた。久しぶりに顔を合わせても意気消沈するメンバー達。

しかし落ち込んでいる暇もなく、欠員補充の二名を加えたストライクウィッチーズには、不可解極まりない指令が下る……

プロローグ1 予期せぬ訪問者（前書き）

時期を逸した感はありますがストパンの小説です
展開はシリアスだと思いますが、一応ギャグのつもりで書いてます

プロローグ1 予期せぬ訪問者

魔女として完全にあがりを迎えた坂本美緒は、第501統合戦闘航空団の解散後、扶桑へと戻り、再び海軍ウィッチ養成学校の臨時教官としての任に就いていた。

戦地を離れて一カ月。美緒は個室の窓から、夕陽の沈んでゆく海の向こうを睨むように見つめていた。遠く戦場ではヴェネチア・ロマニーヤ解放の歓喜から一転して、悪夢の一カ月だったはずだ。

人類は悪夢から覚める事が出来るのだろうか？ 尽きる事の無い不安が包む。そして、この悪夢は自分が招いたのかもしれないと思うと、自身への憤怒が湧き、前線に戻れぬことへの悔しさが堂々巡りになって美緒の心を蝕んだ。

ドアのノックと共に、従兵が声を挙げた。

「坂本少佐、土方です」

土方に部屋に入るよう促す。ドアを開けた土方は一瞬美緒を見て怯んだように思えた。

いかん。美緒は自分が酷くきつい顔をしていることを知って、顔を伏せて目を閉じ、表情を柔和にするよう努めた。

「何の用だ」

顔を上げた美緒に、安心したように土方はドアの脇へと体を退けた。

「坂本少佐、お客様です」

下がった土方の後ろから現れた、尉官服を着込んだ長身の男に、思わず美緒は目を丸くする。

「お久しぶりです。坂本少佐」

思わぬ客だった。美緒は少し狼狽した。

「お、お久しぶりです。斉藤……少尉」

美緒は階級章にちらりと目をやった。それに気付いた斉藤は笑った。

「フフ、万年少尉とか思わないで下さい。予備役になった経緯が経緯だったので、復帰の際ちよつと降格されました。それでも一応昇進はしているんですから。まあようやく九年前と同じになっただけですけどね」

美緒は斉藤の丁寧な言葉遣いに違和感を覚えずにはいられなかった。九年前の事が次々思い出される。宮藤博士とストライカーユニットを開発していた頃だ。あの頃はまだ彼の方が上官だった。自信に満ち溢れる、鋭く威圧的な声が美緒の頭の中に浮かんた。彼が軍を去ったときの、廃人同様の青ざめた顔も。

「この九年間、あなたの御武功はよく耳にさせていただきました。立派になられて、そしてこの激戦を生き帰られたことが、かつて共にストライカーを開発していた者として、何よりも喜びです」

生きて。その言葉が美緒に引つかかった。スザンナ少尉……。

彼はね、本当はすごく寂しがりやなんだよ。だから私が傍にい

てあげなくちゃ

真つすぐな瞳で彼女ははにかんだ。確かに、彼は彼女を失ってから崩れていった。

「ありがとうございます」

思わず美緒は頭を下げた。斉藤は切れ長の目を細め、微笑んできた。

「止めて下さい。今はあなたの方が階級は上なんですから」

「いや、しかし……」

斉藤は目でチラリと後ろを指した。珍しく美緒がうるたえているからか、土方が心配そうに見つめている。部下への示し、と言っているのだろう。美緒は仕切りなおすように一度咳払いした。

「分かった。斉藤少尉」

斉藤少尉から笑みが消えた。美緒は心を構えた。

「今日はあなたに御協力をお願いしに来ました」

協力？ そう訊く美緒に斉藤はゆっくり頷いた。

「今、この世界に異変が起きています。それは今回の新型ネウロイの出現だけではありません。それは一端にすぎない。これからもっと、悲惨な事が起こるはずです。それを防ぐためには、長年眠っていたに等しい私だけでは無力すぎる。各方面に顔のきく、少佐に是非御助力願いたいのです」

そういつて齊藤は頭を下げる。美緒は眉間を寄せた。

「異変？ あのネウロイが一端だと？ まだ、何か起こるというのか？」

「私にもほとんど正確な事は分かりません。しかしほうっておけば必ず多くの人々が苦しむことになる」

「何故、貴方はそんな事が分かる？」

「信頼できる人からの情報、です」

「信頼できる人？」

「それは、言えません。今は言える段階にない」

大きな体で威風堂々と、涼しげに答えるだけの齊藤に美緒は拳を握った。イエスカノーか、それだけを求めている。あの頃の少年っぽさはすっかり無くなっていったけれど、自尊心が強く強引なところはまったく変わっていないと美緒は思った。それが、あの人の命を奪ったのに。

「私に軍上層部にかげ合えと、そういうことか？」

齊藤は首を横に振った。

「そういう事もあるでしょうが、それだけではありません。坂本少佐は私の性分を知っているでしょうが、まず私は返事が欲しいのです。そうでなければ話が始められない」

坂本は渋い顔をして腕を組み、目を落とした。

「詳しいことが分からない以上、こちらとしても判断をつきかね

るのだが」

ひとつため息を吐いて斉藤は口を開く。

「言える事はまず、この話は他言せぬことです。その兵曹君も
いいかね」

突然振り返った斉藤の射抜くような視線に、土方は思わず後ずさりして、頷いた。

「異変は、この扶桑皇国軍内部で始まったのです。どこに敵が潜んでいるか、分からないのですから」

驚く二人に斉藤は続けた。

「この異変を引き起こした人間達は、少佐達とはけして相容れないでしょう。必ず坂本少佐はその異変の主と対峙することになるはずです。その時になってから慌てふためいても、もう遅い。彼らは世界中に根を張っています。そして今芽吹こうとしているのです。私たちは早急に彼らに対抗するだけの力をつけつつ、またその時間を稼ぐために彼らの邪魔をしていかななくてはならないのです」

斉藤は静かに、強く語った。美緒を向く目は、真つすぐに澄んで見える。ふと、スザンナ少尉が話しかけてくる幻想に美緒は襲われた。

おねがい、美緒。彼の力になってあげて。彼を、信じて

押し黙る美緒を斉藤はじっと見つめていた。

「おねがいします。坂本少佐。この異変を沈めるために御助力を」
もう一度、深く頭を下げる斉藤。

「分かった。斉藤少尉。手を、貸そう」

美緒は観念したというように頷き、組んでいた手を崩す。斉藤はにっこり笑って美緒に握手を求めた。彼は変わったのかもしれない、と美緒は思うことにした。本当にこの悪夢を終わらせることができないなら、何だつてする。今は彼の言うことを信じるしかないのだ。

二人は握手をした。斉藤の笑顔の向こうに、美緒には懐かしく優しい笑みが透けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5103o/>

ストライクウィッチーズ 木星より愛をこめて

2010年10月25日20時26分発行